

観想考

イギリス紀行・・・岩城 初男



様々な見聞・体験は、人生の中で、有形・無形の「人生力」として生きてくる。

イギリス旅行を通じ、同じ島国でありながら独自固有の文明を培ったイギリス・日本両国間の発展相違に、感嘆の震えを覚えた。南はロンドン、ケンブリッジ、北はエジンバラ、湖水地方。4つの土地を巡る旅行での見聞から、「相違性は何か」を自分なりに考察する。

イギリスの風土、人間性、社会構成について

風土： 遠距離列車での移動を通じて、自然環境との調和が取れていることを知る。人間生活に適した環境で、精神的・肉体的に疲労を感じさせない。

人間性： 宿の主人や街の人々の印象から、個々人が自分自身の顔・生き方を持ち、良い意味で、他人と同化した生き方をしていないことを見、そこに彼らの自信すら感じた。

社会構成： 街や地下鉄での印象から、ある程度の多人種社会であることが読み取れた。移動中にも人種間の揉め事を目にする事もなく、良好な多文化社会を構成していると感じ、そこに寛容な国民性を見る。長い歴史・伝統が培った、風土、人間性、そして社会構成。多様性と確たる輝きを放す国。感銘を心に刻んだ。

日本の風土、人間性、社会構成について

風土： 四季の織り成す彩り、様々な色に染まる世界、稀にない自然環境の調和。人間生活に持ってこいの環境である。

人間性： 人間性は顔相に表れるといわれるが、昨今、老若男女問わず、表情の表れない淡白な顔に、同一化しようとする者の寂しさが漂う。

社会構成： 有史以来の単一人種社会で、互いに交わらずとも、暗黙の中で意思疎通を図ってきた。

思いのままに・・・

ほんの少しの見聞で、他国民を一般化し自国民との比較を

論ずることは出来ないが、比較対称を自分自身に置き換えて、自分とイギリスで出会った人々との対比を通じて、沸いた感情を思いのまま綴ってみる。

「気付こうとしなかったのか、考えようとしなかったのか、それとも無意識に漂流していたのか。」そのことに気付いたこと自体が大きな前進。人間生活に最適な環境の中にいることが当たり前であるかのように認識し、無意識に生活を送ることの恐怖を覚えた。また、言葉による伝達能力の欠如、感情導入の薄弱、無知。改善の余地は認めるものの、実効性に乏しいのが日常茶飯事で葛藤の日々。そして、寛容さや思い遣りのある一個人として自信のある歩みが出来ないことへの苛立ち。常に心しているのだが、「人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ねよ」に至らない。

両国間の相違について

日本における「便利の不便」、イギリスにおける「不便の便利」。相反する両国の社会環境。不便の中で生きる知恵ある人々の、優雅な人生の謳歌。今回の旅行で、日本人が過去から今現在に至るまで置き忘れてしまった大切なものを教わった。

人は、「一個人」また、「一人間」として、様々な関係を育み、有機的集合体である人間社会を構成する。そして、自分自身もその中の一員である。人間社会の一構成員として生き、同時に自分を輝かせ続けていくためには、各個人の持ち得る特有の個性を磨き、確りした信念を持ち、そして知を絶えず求め続ける姿勢であることが肝心である。また、個々の人間関係においても、心の通う有機的な関係を築くことが肝要である。

ところで、今回の旅行で、そうした心の通う有機的な人間関係の一場面を見る機会にも恵まれた。場面は、ケンブリッジ大学クレア・カレッジ中庭でのこと。緑の庭、初夏の花々に囲まれた空間の中で、老庭師と老夫婦（卒業生だそうだ。）の奏でた趣ある情景。三者三様の間合い、仕草、流れる会話。美しい瞬間に思わず息を呑んだ。この新鮮な体験を心に刻み、彼らの魅力溢れる生き方を指針としたい。

平成 23 年は国際森林年です・・・ 米田雅子



日本の国土の67%は森林が占め、森林比率の高さでは、日本はフィンランドに次ぐ世界有数の森林国家です。戦後の緑化運動で植えられたスギやヒノキも大きく育ち、森林の年間生育量は、日本の年間木材使用量を超えています。しかし、日本の国産材の割合は24%にすぎず、森林が枯渇しつつある海外から木材を輸入しています。

日本の人工林の約6割は間伐を必要していますが、現状ではコスト面から適切な間伐が行われず森林は荒れています。

また間伐を行っても、作業道がないために、木材の約7割は山に捨てられています。これからは、林業の仕組みを見直し、木を適切に伐って搬出し、国産材を使うことが大切です。そのための活動を、産業界が林野庁と協力して行っています。森林再生は、地球温暖化防止、水源かん養にもつながります。

サーツの皆様、平成23年は国連の国際森林年です。花粉病を減らすためにも、国産のスギやヒノキをもっと利用しましょう。（サーツ相談役／JAPIC 森林再生事業化研究会主査）